

---

# 碧のリリーフ

蒼井七海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

碧のリリーフ

### 【Nコード】

N3925BA

### 【作者名】

蒼井七海

### 【あらすじ】

今、このレオ・ミルス王国には、人間と動物の影に隠れて、ひっそりと幻獣が暮らしている。

そんな中、進み続ける少年がいた。

そんな中、友を捜す少女がいた。

二人の旅路が交わる時、運命は動き出す

## ブローグ 混血の王(前書き)

始めてしまったオリジナル小説。

ブローグは短めです。よろしくお願いします。

ちなみにハンドルネームはサイトで使っている物です。

## プロローグ 混血の王

十五年くらい前の話だ。

かつてその国には、人間やごく普通の動物以外にも、“幻獣”と呼ばれる特殊な種族がいた。

彼らは魔力を持っており、なかには人間に化けることが出来る者もいた。その者達は、町へ出て人間と交流を重ねて、ほかの幻獣達に土産話を聞かせたりしていた。

中には、人間と交わって子を成す者まで出てきていた。

いろいろと話は聞くが、とにかくわかることは

彼らは、人間が大好きだった。

彼らは、争いが嫌いだった。

このふたつのことだった。だから彼らは、人間と争うようなことにならぬよう、積極的に人間と交流を重ねようとしていた。

だが、人間は。

交流を重ねていくにつれ幻獣のいいところだけでなく、恐ろしいところも知ってしまった。

彼らの中にある膨大な魔力。彼らの恐るべき身体能力。そして、人間と積極的に関わろうとするその姿さえ、人間側には悪いように映ってしまった。

交流が深まっていくにつれ、人間達は陰で幻獣を滅ぼす策を立てるようになってしまった。

そして、ついに。

人間が動き出す。

王国軍から特殊部隊を派遣し、その国の人間は幻獣を、その仲間を、狩った。そして、町の近くに住んでいた幻獣の大部分が姿を消した。

この出来事は後に、『幻獣狩り』と呼ばれることになる。

その『幻獣狩り』から約五年後。

レオ・ミルス王国の王都たる町、ミルス市。その郊外にある建物で

運命は、動き出そうとしていた。

『ホギヤー、ホギヤー……』

薄暗い、静かな建物の中に赤子の泣き声が響き渡る。

赤子を抱いているのは、一人の女だった。黒い髪を真つすぐ伸ばし、一房後ろで縛っている女。どうやら、赤子の母らしい。

赤子は彼女の胸に抱かれていた。

そしてその横にいるのは、まだ見たため年若い男だった。

「そいつの名前……なんにする？」

男が口を開く。女はそれに小さく答えた。

「そうね……あなたが前々から考えていたのがいいかもしれないわ、キルス」

「……………」

男　キルスはにっこりとほほ笑んだ。

こうしているとただの穏やかな父だった。しかし

「キルス」。

その名を聞けば、ほんの三年ほど前の世界を生きている人々は震えあがるだろう。

『“混血の王”が現れた』

そう、言つて。

## プロローグ 混血の王（後書き）

“混血の王”

この単語は重要です。ちらちらと出てきます。

人名って悩みませんか？（え

また、次回も宜しくお願いします。

## 第一話 魔法士のいる町(1) (前書き)

さて、始まりました第一話。

第一章に分類される話の「第一篇」という感じですが。

第一章は全三篇で構成されています。

ちなみに今回は「スクロールだと読む気が失せる」という姉の言葉を参考に、長い長い一話を幾つかにわけてみました。どうでしょうか？



## 第一話 魔法士のいる町（1）

町にわずかながら残っていた雪もすっかりとけ、季節は春を迎えようとしていた。

もつとも、寒さが和らぐ気配はまだなく、それはまだ少し遠いところかもしれないが。

大陸の海沿いに位置する、緑多いレオ・ミルス王国。その王国の片隅で、ことは動き出そうとしていた。

レオ・ミルス東部の町、フェーン。王都へ行く者達の進路上にあるこの町は、他に比べて比較的人が多く、いつも活気に満ちあふれている。それに加えてここ最近、春が近いせいか気温もだいぶ上がってきている。そのため、観光客は増える一方だ。

ただ、その観光客に混じって、時々王都やその周辺を目指す“旅人”もやってくる。その旅人が利用するのは、だいたい宿屋と酒場（と時には情報屋）くらいで非常に偏っているのでわかりやすい。後は、その辺で露店をやっている商人から必需品を買うこともある。まあ、いずれにせよ客が増えることに変わりはないので、商人にしてみれば、誰であろうと構わないのだが。

しかし、だ。たまには、こんな風変わりな旅人もいる。

町の小さな飲食店。その、カウンター席の一番端に座っている少年は、ふと、思い出したように口を開いた。

「なあ、おじさん。あの模様、何？」

その時、忙しなくカウンターを動きまわっていた店主の動きがぴたりと止まる。そして振り向いて、少年にこう質問を返した。

「……君。お母さんやお父さんは、どこにいるんだい？」

すると少年は、飲んでいたお茶を盛大に吹きだした。ストローを

通してだったので被害は少なくて済んだが。

「あいな！ オレ、一応旅人なんだぞ！！」

「はあ、君みたいなのが。今いくつ？」

「十五！！」

半信半疑に訊いてくる店主に、はつきりと言葉を返す少年。薄く金色のかかったこげ茶の瞳が、なぜかららんと輝いていた。

ただし、答えたとたんに二人の間に沈黙が落ちた。そして、その沈黙の後……

「……十五なのに、王国内を転々と旅かい。ご苦労様」

「待て　　い！　それ以前に“こいつ本当に十五か？”とか思ってるんだろ！？」

「だって信じられないんだもん」

少年は言葉に詰まる。店主がそう言うのも無理はない、と思ってるからだ。

背が少し低い、というのもあるが……おそらく彼は同年代の中ではとりわけ童顔なのだろう。口調などで判断しなければ、場合によっては十一位に思われることもあるかもしれない。

あと、一応これは彼のコンプレックスである。

少年の様子からそれを察したのか、店主が話題を変えてきた。

「で、なんのために旅なんてしているんだ？」

「んー。まあ、なんとなく？」

「なんとなくって……」

店主はやや呆れたようにそう突っ込んだ。今の時代は、このミルスを「なんとなく」旅するものなどいないと思っていたから。理由を簡単に言っと、そう……「昔より物騒になったから」である。それこそ凄腕の物好きならいるのかもしれないが、そこまでにならないと「なんとなく」旅はできるものではない。今のレオ・ミルス王国はそんな国だ。

店主が悶々と考え込んでいると、ふいに少年が口を開いた。

「ところでさー。さっきから聞きたかつたんだけど」

「ん？」

それに気付いた店主が顔を上げると、少年が店の壁を指さす。そこには、円を中心とした図形と、不思議な文字で構成されている模様があった。

「あの模様、何？」

店主は「ああ」と言い、一言で説明した。

「魔法円だよ」

魔法円とは、古き時代に人間が生み出したといわれる力、“魔法”を行使するために用いる円だ。しかしあくまでも、魔法円は“人間が魔法を使う時“基本的には”必要になる道具のような物”である。そのため、中には魔法円を必要としない魔法士もいるというわけだ。

しかし、それなら少年もよく知っていることである。“あれ”が魔法円だということも、はつきり言ってみればわかる。

それをわざわざ（一言だったが）説明してきたのが妙に癪かんに障さたらしく、彼は顔をしかめて言いかえした。

「あのなあ……それは見りゃわかるよ。オレが聞きたいのは、なんでその魔法円がこんな普通の店の中にあるのかってことなんだけど？」

すると店主は、急に嬉しそうに笑って話し出した。

「この店に魔法士様がいらっしやっつてな。そのときに「魔よけになるから」とわざわざ描いてくださっただよ」

「魔法士？ いるのか、この町に？」

少年は思わず身を乗り出して聞いた。魔法士 分かりやすく言えば“魔法使い”。そんな奴が、こんな町にいるなんて。

だが、そんな少年の明らかな態度の変化に気付くことなく、店主は言葉を紡いだ。

「ああ。十五年前、くらいだったかな。“ある事件”の後にふらつとやってきて、当時は寂れていたこの町を、あつという間に復興してくれたのさ。魔法の力で」

そこまで聞いて、少年は顔をしかめた。  
何かが引っ掛かる。

（十五年前。ある事件 “幻獣狩り”の後？）

少年が心の内で呟いた時、ドアチャイムが軽やかな音色を奏でた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3925ba/>

---

碧のリリーフ

2012年1月10日06時46分発行